



竹千代賞

花と泡沫の魔法

悲月 玲

むかしむかし、一日中ずっと日が昇っていて明るい国がありました。

その国を囲うように大きな大きな森がありました。

森は一日中夜のように暗く不気味な声が聞こえるため、人々から「魔獣の森」と呼ばれていました。

その森の中の一際大きな大きな木に住んでいた魔獣がいました。森の魔女です。

魔女はいつも一人でした。ですが、寂しくはありません。

なぜなら、大きな大きな木の上から国や森を見渡せるからです。

ある日、魔女はいつものように木の枝に腰を掛けて国や森を見渡しました。

いつもどおり、国では祭りや市がやっていましたが、森は違いました。

「今日の森はいつもより騒がしいな…。」

魔女が不思議に思いよく見ると、理由がわかりました。

森の中に一人、人間の子供が入り込んでいたのです。

この森に住む者達は基本は植物などを食べますが、人間を食べる者もいます。

魔女は普通に人間を見捨てていたのですが、今日は違いました。何故かあの人間の子供が可哀想にみえたのです。

魔女は魔法で子供のところまで行き、子供を囲んでいた者達を倒しました。

「…大丈夫か？ 人間。」

まだ状況を理解していない子供に声を掛けますが、子供は何も応えません。

まあ、当然です。人間とこの森に住む者達は会うことはありません。人間の、しかも幼い子供が驚かないわけがありません。仕方がないと魔女はその場を離れようとしたましたが掴まれた手によって、それは阻止されてしまいました。

「ねえ！ 貴方は森の魔女さん？」

子供から出た言葉に魔女は驚き、どう応えようか魔女は困りましたが無意識に頷いてしまいました。

その行動に魔女自身が驚いていましたが、子供は違いました。キラキラとした目で魔女を見上げます。

「やっぱり！ 僕はシャルレイベ・アラナー！ 皆にはレイベって言われているの！」
子供の明るい声が森に響きます。

その声を聞いてまた、森に住む者達がやってきました。

「チツ…。ちょっとまってて。」

今度はもっと多く来たので倒すのに時間が掛かったものの、何とか倒せました。

「はぁ…。声は気をつけてよ。」

そうは言いましたが子供は知りたがりの歳です。声は小さくなりません。

「ねえ！ 僕、貴方にお願いがあってここに！ んぐっ！」

あまりにもうるさかったため魔女は子供の口をふさぎました。



魔法を使って魔女と子供は大きな大きな木の上にいきました。

「わぁ！ ここが貴方のお家なの？ すごーい！」

子供は楽しそうに辺りを走り回ります。

いつもならイライラして怒鳴り散らす魔女でも、この光景を見ていると心がぼかぼかと温かくなりました。その感情を不思議に思いながら魔女は子供に問います。

「どうしてこの森にいたんだい？」

子供は今気がついたようで目を輝かせて魔女に近寄りました。

「あのね！ 僕、貴方にお願いがあってきたの！ 僕のお母さんがふち？ の病なの！ 魔女さんをお願いしたら治してくれるって聞いたから……」

なるほど。やっと魔女は子供が何故来たのかわかりました。

ですが、魔女が願いを叶えるのには代償がいります。

子供はそれを知っているのでしょうか？

「子供よ、代償を知っているのか？」

それを知っていないのであれば、流石に可哀想だと魔女は思いました。

あら？ 魔女は昔、代償を知らぬ魔獣の子供の願いを叶えました。しかも、代償を知らないことを知っています。

自分でもそれを思い出しながら不思議に思いました。

魔女がそんな思考を巡らせている中、子供は暗い表情かおをして俯かぶっていました。

「……？ どうした？」

子供が暗い顔をしていることに気がついた魔女は声を掛けます。

子供はいきなり顔を上げ、目に涙を浮かべながら言いました。

「ねえ！ 僕の命はいらないから！ お母さんを助けて！」

そう、魔女の願いを叶える代償は命でした。

いつもなら女、子供関係なく命をとる魔女でしたが、この子供だけは何故だか命を取りたくなく、魔女は自分の初めて抱いた感情に困り果てました。

「だが……。子供よ、母親の病名は分かるかい？」

子供は少し考え込むような動作をすると、ハッと思い出したように魔女を見上げました。

「あのね、お母さんはローズリアっていう病気なの、お医者さんは一生治らないって。」

ローズリア……。それは、最近国で発見された、不知の病です。

最初は風邪のようですが、時間が経つと身体に根を張られ身体の栄養が養分として使われ、花が育ち、最後は美しい薔薇を咲かせ死んでしまう治しようがない病気でした。

「うーむ……。子供よ、まだお前は幼い。だから代償を変えよう。」

自分でも驚くような言葉が魔女から出てきました。子供は顔を上げ願うような目で魔女を見ます。

「本当に？ 僕、死なないの？」

「ああ、死なないよ、しかし願いには必ず代償がいる。」

自分が、死なないことを知った子供は嬉しそうに目を輝かせましたが、代償と聞くとまた、表情が暗くなっ
てしまいました。

「大丈夫だよ。痛い思いはしない。お前から貰う代償は私の弟子になることだよ。」

「え？」

子供の暗い表情かおを見るのが辛くなって魔女はそう言っていました。

ですが、魔女は自分の師匠に弟子を作れとずっと言われていたので、これはこれでもいいのかもしれないと思
いました。



自分の命がなくならない喜びと魔法の弟子になれる喜びで子供は飛び跳ね、喜びました。

魔法はその姿を見て自分の心が温かくなっていることに気づき、首を傾げましたが特に気にすることではないと魔法の準備を始めました。

子供はそれを輝いた目で見ています。その温かい光景に魔法の口元が緩みました。

魔法は子供の母親に病を治す魔法をかけました。

「子供よ、母親の病は治ったぞ。」

魔法がそう言っても、子供は半信半疑です。

仕方なく魔法は水晶を持ってきて母親を見せました。子供の母親には花がなく人間らしい姿をしていました。それを見て子供は安心したようで、優しい笑顔を見せています。その笑顔を見ると魔法の心も優しい気持ちになりました。

子供は魔法の方を向くと、笑顔で話しました。

「ありがとう！魔法さん！これで安心して魔法さんの弟子になれるよ！」

子供は笑顔のまま、右手を魔法に差し出しました。人間同士の挨拶、「握手」です。

魔法は「握手」を本でしか見たことがないため、少し戸惑いながらも子供の手を握りました。

それから、毎日子供：いえ、レイベは魔法に魔法を習いました。

魔法は、上級魔法だったので、魔法は凄く上手でした。なので、レイベもそれに憧れ沢山練習を重ねました。

レイベは魔法の教えた事をすぐに覚えましたが、魔法は魔獣、レイベは人間です。魔法の差が大き過ぎます。

昔、魔法に弟子入りを申し込んだ人間が魔力が少なく逃げ出した事もあったのですが、レイベは決して逃げ出さず、必死に練習を続けました。

月日は流れ、レイベは魔法と同じくらい魔法を使えるようになりました。飲み込みが早いレイベですが、できないことがあります。「願いを叶えること」です。どうやっても、願った人の命が代償になってしまいま

す。

レイベはその事をととても悲しがっていて、願いを叶えるといつも泣いて帰ってきました。

それは何年経っても同じでした。

時が経ち、レイベは青年になりました。ですが魔女はとても歳を取っている筈なのに会ったときと同じままです。

レイベは不思議に思いましたが、きっと魔法という結論にいつも辿り着いてしまうので諦めました。

ある日、いつもどおり魔女とレイベが魔法の練習をしていると、魔法を放った魔女が大きな咳をしました。

レイベは魔女を心配し、声を掛けますが魔女はレイベに大丈夫と応えました。

レイベは風邪だと思い、魔女に栄養のある物を食べさせたり、早く寝かせたりしましたが咳は酷くなっていきました。

ついにある日、レイベは魔女の身体につるがあるのが見えてしまいました。

「魔女さん！」

レイベは泣きました。

魔女にまで母親を苦しめた病氣ローズリアに掛かってしまったのです。

レイベは治し方を必死に調べましたが治し方は見つかりませんでした。

魔女は日に日に弱っていききました。

身体には大きな蕾があり、あと一日というところでしょうか？

その姿をみてレイベはある決断をしました。

「魔女さん……。今まで色々ありがとうございます。僕、魔女さんには感謝しきれないほどの恩があります。だから、今ここで恩返しします。」

魔女には理由がわかりませんでした。



レイベが魔法陣の中心に立ち、呪文を唱え始めたところで、やっとレイベが何をしようとしているのかわかりました。

魔女は必死にレイベを止めようとします。ですが、その声はレイベには届きませんでした。

「ありがとうございます！ 大好きでしたよ、魔女さん。」

レイベは自分の命を代償に魔女の病気を治して、その場に倒れ動かなくなりました。やっとできた弟子がいなくなることも、レイベという存在がいなくなる方が魔女には辛いことでした。

「……ああ、そういうことだったんだ……。」

魔女はやっと自分のこの気持ちは何なのかを理解しました。

そう、魔女はレイベに「恋」をしていたのです。訳が分からなくなって、魔女は悲しみ、泣き崩れてしまいました。

* * *

それから何年も経ち、魔女は一つのお墓の前に立っていました。

魔女は白と赤の花を持ってお墓に語りかけます。

「あれから、何年も経ったわ……。元気にしている？」

花が風に吹かれて、揺れました。

まるで、レイベが頷いているようで魔女は思わず微笑みます。

少しすると遠くから鐘の音が聞こえてきました。

「……そろそろ、私は行かなきゃ……。じゃあ、また来るよ。」

魔女はお墓の前に花を置くとその場を去っていきました。

魔女が置いたシザンサスの花が供えられたお墓には『我が親愛なる弟子、シャルレイベ・アラーナ、ここに眠る』と刻まれていました。